城間（しろま）※方言名：シロマ

集落の西側の外れにある「城間トフル墓群」。トフルとは方言で「天国へ通る道」と言われています。稲作が中心であった頃は、水田や集落近くの川でサイ（小エビ）やタナガ（テナガエビ）、沢ガニがたくさん獲れていたといいます。現在はサトウキビ栽培が中心となりましたが、川にはまだタナガなどの姿が見られます。

石ガンバラとミシャ（白粘土）

メーゴ（前川）は西から東に流れ、県道を過ぎ北側にカーブし海に続く。メーゴを境に宇宿集落と城間集落に分かれる。川は両集落の憩いの場であり、子供達は石ガンバラから飛び込み、ウナギやカニを獲る川遊びの場であり、女性はコーシャミシャ（白粘土）で髪を洗う。下流は洗濯などの生活用水として使用していた。

コーイリガシキ

メーゴ（前川）では旧暦の6月、シキョ当日に水の神を祀る。この日に 1歳未満の供をメーゴに連れて行き、水で清めると祈願と水難事故祓いになる。その後、新数粒入れ、赤飯を炊いて配る。「川と海する畏れがあり、このように祀る」と古老はう。「アビラシハジメ」ともいう。

サンゴの切り石の石垣

シマ（集落）には平たい珊瑚を積み上げるサンゴの石垣は多いが、石灰岩を切り合わせる布積石垣は少ない。旧中場家の屋敷の石垣は中場常益氏が自宅を新築した際に、万屋・城間の農事組合員が積んだとのこと。この一帯は同様な切石垣の屋敷囲いが多く、城間の貴重な宝である。

トフル墓群

シマでは小高い丘に横穴を掘った一族墓をトフル墓と呼んでいる。トフルとは天国る道の意味。

トフル墓群は、集落の西側外れに位置し近は小高い丘をなしている。標高16mのこはクール層と呼ばれる砂岩でできている。内部は天井高が約1.6m、奥行約3.6mである。

1号から9号墓が半径100m以内にまとま立地し、大きさもほぼ均一である。

墓地内のトフル墓

トフル墓はそれぞれ一族の墓であり、共同墓地内の4号墓を始め数基は、今も毎月子孫によりお参りがされている。横穴の内部はフラスコ状になっており、妊婦に例えて母の胎内に戻り、生まれ変わることを意味し、奥に遺体を安置するため段が作られているものもある。数百体の人骨が納められているものもあり、人骨は改葬され甕（かめ）に納められている。

サンゴの井戸

城間のシマは北側に子供が泳げるぐら川と南側に小さな川が流れている。

畑などに散水する水は井戸水や川の水をい、飲み水は湧水や限られた井戸のものを用していた。中でも方形にサンゴの積石でた共同井戸はハマジョグチに行く途中にあ集落の人が利用していたが、現在では使れなくなり雑草に覆われている。

戦浜

戦浜は元亀 2（1571）年旧暦2月、琉球王国の尚元王が奄美へ3回目の賊徒討伐を行った時の上陸地点とされ、激しい戦闘の場となったためその名がある。この一帯は外洋からの船が行き来していた。古老は「昔、城間はきょらむん（美人）が多かったが喜界島に行って帰って来なかった。」と話す。

リュウキュウアサギマダラの越冬地

戦浜は万屋から宇宿までの砂丘地のこ総称している。大きな砂丘のためあちこ海岸に出入りするハマジョグチがある。地帯はアダンやモクマオウが群生してお冬に気温が約10度前後になるとリュウキュサギマダラが集団で越冬する場所が数か所あ